



新骨たくましい東独の砲丸投げの選手

1973年9月、ベオグラード(ユーゴ)で開催された第1回世界水泳選手権。東ドイツの女子選手は、筋肉の盛り上がった幅広い肩と、低音の声で米国女子選手を驚かせた。この前年のミュンヘン・オリンピックでは、米国女子チームは金メダル8、銀5、銅4という好成績を残した。このとき、東ドイツは金ゼロ、銀4、銅2の結果だった。それが、わずか1年で立場は逆転、世界選手権で東ドイツは何と、14個の金メダルのうち10個までをさらったのである。メダルの数以上に目を引いたのは、彼女たちの体格の変化だ。1年の間に、体重は平均で10kg、身長が4cm以上、のびていたのである。ベオグラードで、東ドイツに10個の金メダルをもたらしたのは「魔法の薬」ステロイドであった——というのがもっぱらのうわさである。

当初は男子選手だけの問題として注目

ステロイド(正式にはアナボリック・ステロイド)とは、たん白同化を促し筋肉を増強する働きがあり、男性ホルモンと同様の効果を持っている。米国の科学雑誌「サイエンス」は1972年、ソ連の男女選手たちが1954年ごろから男性ホルモンを使用していることについてとりあげているが、その記事の中で米国の重量挙げのコーチも、1959年に自分のチームの選手にステロイドを与えたと語っている。しかし、米国のコーチはその後、ステロイドと同じ効果を持つブラスターに替えている。

1973年の夏、米国上院はスポーツ選手の薬物使用問題を取りあげた。ここで、米国スポーツ界において、ボディビル、重量挙げ、アメリカンフットボール、陸上競技とくに砲丸投げ、ハンマー投げ、砲丸投げなどの選手たちがステロイドを使用している事が明らかになった。また、1956年のメルボルン・オリンピックのハンマー投げで優勝したハロルド・コノリー(米国)は1960年のローマ・オリンピックでソ連の選手たちがステロイドを使っていることを初めて知り、次の東京

STEROIDS

—ステロイド—

これまで科学者は若い女性が男性ホルモンを使用することを、どれだけ警告しつけてきたことか。いくらか副作用を説いても、金メダルを目指す彼女たちは、警告に耳を貸そうとしない。彼女たちをそれほどまでにトリコにしたステロイドとは、一体何なのか。

マージョリー・シユアー

オリンピックまでに、これは米国選手の間では公然の秘密となっていたと述べている。

IOC(国際オリンピック委員会)の理事委員会でも1967年ごろから、ステロイド使用禁止の意見があったが、検査方法が確立する1976年のミュンヘン・オリンピックまでは何ら措置はとられなかった。70年代前半のステロイド問題は、男性に絞るものとしてだけ捉えられ、上院の調査でも女子選手に関してはほとんど触れられなかった。

女性選手のアゴヒゲと声変わり

アナボリック・ステロイドは服用と注射の2つの方法で使用することができる。ステロイド使用による長期的な体への影響は、まだ全部が解明されてはいないが、短期的には次のような変化が見られる。

男性では、テストステロンという男性ホルモンが毎日、5~10mg、体内で作られているが、ステロイドを使用することで、テストステロン値が下がり、精子の製造能力が低下し、ついには不妊をひきおこすが、使用を中止すればもとの状態にもどる。

一方、女性は体内に0.1mg程度のテストステロンを常に蓄えている。これは男性の約1%の量になるが、女性がステロイドをごく少量でも服用すると、目に見えて大きな影響が現れる。アゴヒゲ、ハゲ、声が低くなる——といった具合に、男性化してしまい、たとえ使用を中止しても、元には戻らない。また、生理不順も副作用として考えられる。

このほか、肝臓に対しては、肝臓ガンなどの疾病をひきおこしたり、炭水化物や脂肪の代謝に変調をきたすために動脈硬化を早め、心臓の病気や高血圧になる恐れもある。

ステロイドは、筋肉の成長を促すものだが、それに付随した腱には影響を与えない。したがって、腱の炎症をおこしたり、ついには筋肉の成長に追いつかない腱が裂けてしまう。さらに、筋肉が骨格を圧迫して、

成長過程にあることもたちの成長を妨げ、発育不全をおこすことになる。

ステロイド服用を強要する米国チーム

ベオグラードでの東ドイツの輝かしい勝利が、「ステロイド信仰」を広めていった。米国の陸上界でも、ステロイドを使用するコーチが現れ、中には服用を拒否した選手に強引に飲ませる者もいた。

カリフォルニア州立大学の陸上部の選手だったデニス・コーネルは、コーチのチャック・デバスからステロイドを服用するように強要されたという。コーチは、全米チャンピオンを何人も育てた実績を持っている。もっといい記録を出したいなら、「ウィンストロル」(アナボリック・ステロイドの商品名)を飲み、ということだった。彼女はステロイドが自分たちの体にどのような影響をもたらすか、服用している仲間の変化を目の当たりに見て、よく知っていた。

長めのクリスマス休暇から戻ったときのことだ。1977年のシーズンを終え、新しいシーズンを迎え、彼女は何人かの仲間が12kgも体重を増やし、信じられないくらいスピードで走っている姿を見ている。

かつて五種競技で7回の全米優勝を遂げているジュン・フレデリックによれば、米国陸上男子選手のうち75~80%が、ステロイドを使用しているという。女子選手は口が固いので推測するのはむずかしいが、10~50%と見ていいだろう。

金メダルのためなら命までも犠牲に

ステロイドの使用に関して、東西の違いといえば、米国の女子選手の場合は自分の意思で選択できるのに対し、東側諸国ではスポーツ選手である限り、拒否できないものである。東ドイツの陸上のトップ選手だっ

たレオナート・ニューフェルトは、1976年の春にコーチからビタミン剤といわれて、ステロイドを与えられた。服用しているうちに、口ヒゲがはえ始め、生理はとまった。彼女は自分の体の変化に不安を持ち、ついにステロイドを飲むのをやめたが、その見返りに、代表選手からはずされ、選手としての全ての特権をなく奪されるというものだった。選手生命を奪われたニューフェルトは結局、東ドイツを去らざるをえなかった。

薬物使用の検査(ドーピング・テスト)が行われるようになったのは、1968年のメキシコ・オリンピックから。ステロイドに関しては、1976年(インスブルック・冬期オリンピック、モントリオール・オリンピック)からである。

その結果、インスブルックでは陽性(ステロイド使用)と出た者は一人もいなかったが、モントリオールでは8人の選手が「クロ」と判定された。このうち7人は重量挙げの選手で、残る1人はポーランド女子五種競技選手ダスタ・ロザニだった。このほか、国際大会で「クロ」と出た女子選手の中には、大物がズラリと顔をそろえている。

長いことかかって開発されたステロイドのドーピング・テストだが、1980年にはオリンピックのほか、他の国際大会でも1人もこの網にはひっかからなかった。それは、ステロイドの使用者がいなくなったということではなく、テストにひっかからない使用方法が見つかったということである。

「国際クラスにある陸上選手の大多数は、たとえ自分の命を削ることになろうと、勝つためにはどんなことでもする」というハロルド・コノリーの証言は、残念ながら真実なのである。

(Women's Sports 1982年4月号より要約)

肩の抵抗が減った。腰から気泡が消えた。〈スーパーバック〉

International Swimfashions

日本オリンピック委員会
日本水泳連盟
ミズノ